「オーストラリア建築に関する研究」

－メルボルンにおける Free Style・Gothic Revival 建築を通して－

建設工学専攻(修士課程)　503134　増田（ますだ）　悟（さとる）

建築史研究　指導教員：　伊藤　洋子　教授

序章　本研究について

0－1 研究背景・目的

日本におけるオーストラリア建築の認知度は極めて低い。ましてや、オーストラリアの歴史的建築物となると、このような歴史の浅い国に、見る価値のある歴史的建築物など存在するのだろうか、と思われる。しかし、歴史が浅い故にオーストラリア特有の発展を遂げ、様々な興味深い建築的現象を生じたと考えられる。

この国はイギリス経由で西洋文明が極めて短期間に移植された場所であり、とりわけ 19 世紀末のイギリス建築を特徴付けた‘様式折衷主義建築’が数多く残されている。また移民により形成された国でもあり、あらゆる様式の建築が存在している。

本研究はオーストラリア、メルボルンの建築を対象とし、19 世紀末から 20 世紀初頭に建設された‘様式折衷主義建築’を中心にオーストラリア建築の独自性を探究することを目的としている。

0－2 研究方法

平成16年8月から9月にかけての約2ヶ月間メルボルンの建築を対象に実地調査を行った。約200件の建築を見、かつそれらを写真に記録した。そしてこれらの建築を様式・年代・地域ごとに分類、考察した。本研究は、この時の実地調査及びその後引き続き行った文献による研究に基づいて、まとめられている。

第1章　建築史概要

1－1 メルボルン建築史

オーストラリアは、1788 年、英国の流刑地として植民地化された国である。オーストラリア国内でもメルボルンは最も西洋色の濃い都市だといわれる。これは、メルボルンがシドニーやタスマニアの様な流刑地として開拓された植民都市ではなく、一般入植者により開拓された都市だからである。つまり殆ど何もない状態の土地にゴールド・ラッシュの富が加わるという理想的な状況で都市を築くことができたのである。

この時代に彼らは実質の伴わぬ虚栄と放漫に満ちた生活を送り植民地に今までになかった虚飾の建築群を次々に生み出した。これらは現在でもメルボルンにおいて主要な建築物となっている。

第2章　都市計画

2－1 都市の成立

メルボルンはグリッドを中心街区として、明確な境もないままに都市が広がっていく。1つの区画を 200mとし、その規模や区分けの仕方について幾度か議論が重ねられた。そして 1837 年に制定させたグリッドが今現在残っているものである。またこのグリッドは川と2つの丘に平行に配置されている。都市には際立った差異はなく、ブロックひとつ、町角ひとつ、通りひとつごとに微妙に変化している。図1に実地調査を行った7つの地域においてそれぞれの主な特徴を述べる。

第3章　建築様式

3－1 メルボルン建築様式について

1850 年以後オーストラリアの建築家達は、折衷主義に没頭した。オーストラリアの都市と主要な町は、イギリスあるいはアメリカの都市と接触があった。教会堂と大学の建物は一般にゴシック・リヴァイヴァル様式であり、それ以外ではネオ・ルネサンスが最も好まれた。両者とも、この地において活発な工夫と革新がなされるとともに、イギリスあるいはアメリカのモデルが考究され採用された。メルボルンにおける様式の種類の幅はきわめて広かった。

3－2 メルボルン建築様式分類

メルボルンの建築は折衷主義がほとんどである。従って明確な様式分類は難しい。ここでは様式を建築の規模、ファサード、構造、色、装飾、材料、形、また先例の様式を引用したか否かを基に定義し分類した。メルボルンで確認された様式は図2のものである。次章よりメルボルン建築の独自性を探究するのに重要な建築様式と一般的な建築様式とを比較、考察する。

City Centre
1837 年にグリッドプランが制定された。様々な 19 世紀の建築が数多く残っており、またあらゆる様式が混在している。

East Melbourne
巨大なゴシック教会が特徴的である。政府の公共施設が集中的に位置している。

South Melbourne
1857 年に巨大な住宅区画として制定された。1980 年代から都市計画の一つとして芸術に関わる公共建築をこの地域に配置した。

Carlton/Fitzroy
細長く区画された地域である。多くのテラスハウスが空間的特長を与えている。メルボルン大学や巨大な共同墓地がある。イタリア系移民の多い地域である。

South Yarra
富と特権の象徴としての建築が多い。1950 年代に建築活動がモダン建築を表現し始めタウンハウスを特徴のない高層建築に建て替えてしまった。

Toorak
1800 年代後半からブームスタイルの大邸宅やアーツ＆クラフツの家が建ち始めた。人口密度の増加により、長い間富裕層の邸宅地域となっていた歴史が偲ばれている。

St Kilda
流行の浮き沈みが激しい地域である。現在は夏期のリゾート地として定着している。またロシア移住者、ユダヤ文化の中心となっている。

図1 地域形態

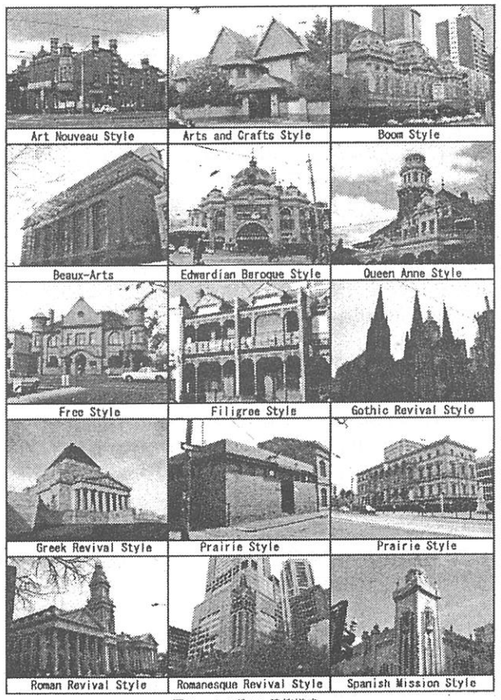

図2　メルボルン建築様式

第4章　ゴシック・リヴァイヴァル

4－1 ゴシック・リヴァイヴァルについて

ゴシック・リヴァイヴァルはイギリスを中心に従来の古典様式に対する批判と、それに取って変わるべきゴシック様式の再興を唱え、かつそれを実践にうつした建築運動である。

4－2 オーストラリアゴシック・リヴァイヴァルについて

オーストラリアゴシックは大きく2つに分類することができる。中世のゴシックを再現したアカデミック・ゴシックと中世の伝統的要素を自由に解釈し組み合わせたフリー・ゴシックである。

4－3 ゴシック・リヴァイヴァル様式の特徴

アカデミック・ゴシック

アカデミック・ゴシックは主に教会に用いられ、形態は、一般に「初期イギリス式」あるいは「装飾式」であった。構造は本質的に石造であり、主に暗黒色のメルボルン玄武岩が使われている。細部や装飾の豊富さはほとんどない。

図3 アカデミック・ゴシック建築

フリー・ゴシック

中世の伝統的要素を自由に解釈し組み合わせつくられた。一般建築はしばしばこのフリー・ゴシックにより建設された。構造には当時新しい材料であった鉄、ガラス、コンクリート等が利用されていた。また、ファサードが大変重要な要素として扱われデザインは大抵、絵画的か非対称であったが、時にはシンメトリーのものもあった。

4－4 ＜歴史の逆転＞

オーストラリアにおけるゴシック・リヴァイヴァルの起源は、都市により違いが見られる。流刑地であったタスマニアやシドニーなどの一部地域ではイギリスと同様、ピクチャレスク・ゴシックが最初に作られた。しかしメルボルンのゴシック・リヴァイヴァルの起源はアカデミック・ゴシックといえる。メルボルンではまるで本国イギリスの威厳を示すかのように、荘厳で厳格な大聖堂が建てられた。こうしてメルボルンではゴシック・リヴァイヴァルが始まったのである。

その後、建築家達によりゴシックの‘咀嚼’が行われた。アカデミック・ゴシックへの‘反発’からか過度に装飾的なゴシックが数多く生まれた。これらがフリー・ゴシックである。また郊外ではただ単に‘模倣’したゴシックも生まれ、ラスティック・ゴシック、カーペンター・ゴシックと呼ばれていた。これらは主に住居に使われた。

ここにメルボルンとイギリスにゴシック・リヴァイヴァルの発展過程における「逆転」を見ることができる。つまり入植者達が本国イギリスに思いを馳せるかのようにアカデミック・ゴシックの教会を建てさせた。しかしそれだけでは飽き足らなくなってしまった建築家達がゴールド・ラッシュの富を得て、折衷的で絵画的なゴシックを数多く建てるというイギリスとは逆転したゴシック・リヴァイヴァルの経緯を辿ったのである。

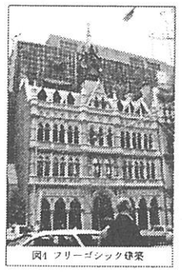

図4 フリーゴシック建築

第5章　フリースタイル

5－1 フリースタイルについて

フリースタイルとはイギリスで1800年代後期から1900年代前期にかけて使われた建築様式である。イギリスにおけるフリースタイルはクィーン・アン様式（公立学校様式）が基になっている。これはレンガ造、レンガのモールディングやピラスター、セグメンタル・アーチをもつ白いサッシュ窓、ダッチゲーブルから成っている。また安く造れ、ロンドンのヴァナキュラーな伝統に沿った様式であることと、従来の学校で使われていたゴシック様式とは異なり市民性を表現する様式である点が正当化された。しかもこの様式は、種々雑多なレンガ建築の先例を参照したものであって、ディテールやプロポーションも古典規則に拘束されないという融通性があった。それ故にこれはあらゆる機能要求に対応し得る様式として学校建築以外にも使われるようになった。これをフリースタイルと呼んだのである。

5－2 オーストラリアフリースタイルについて

まずフリースタイルに関係する様式を挙げる。アーツアンドクラフツ運動、クィーン・アン様式、エドワーディアン・バロック様式、ネオ・ロマネスク様式、アール・ヌーヴォーである。これらを概略しオーストラリアにおけるフリースタイルの成り立ちを考察する。

5－3 フリースタイルの特徴

地元の環境と風土をかなり意識してデザインされた。クラシックな要素は古典のロマネスク、アール・ヌーヴォー、女王アンから得られ歪められ、非対称なものとして使われた。また2つの主要なマテリアルの色とテクスチャーを対比し使われた。煉瓦と石、煉瓦とスタッコなどである。色彩はうす暗い色よりも土のような色が好んで使われた。窓の形や大きさも種類が豊富であり、特に建物の正面に書かれたアール・ヌーヴォーの文字はしばしば特徴的なシンボルとされた。

図5 フリースタイル建築

5－4 ＜オーストラリア的咀嚼＞

フリースタイルはオーストラリアで非常に好まれた様式である。しかしオーストラリアのフリースタイル建築は、レンガ造に限ったものでもなく、ロンドンのヴァナキュラーな伝統に沿ったものでもない。オーストラリアにおけるフリースタイルの「咀嚼」は‘様式の自由選択’という思想に置き換えられた。つまり数ある様式から要素を自由に選択し、自ら形を変形させ自己を表現できる手段として解釈されたといえる。尚且つ 19 世紀後半にイギリスで始まったアーツアンドクラフツの思想が加わり、より発展したといえる。前時代の建築家達にはこのフリースタイルは、どのように映るのだろうか。様式の素材が取り扱われる自由さや世紀の跳び移りなど目を背けたくなるだろう。しかしオーストラリアという国は歴史が浅く、縛られる伝統がない。それ故に陽気で自由なフリースタイルが好まれ広まったといえる。

終章　総括

この国にはイギリスのアカデミックな建築を忠実に再現したもの、それに反発するかのように独自の折衷主義でつくられた建築が残されている。この折衷主義の建築を結局は古き様式主義の中での工夫にすぎず、見る価値などないとするのは誤りであろう。これらの建築は、全ての相対化された様式の中から選択するという極めて知的で意識的な操作によりつくられたといえる。言い換えれば、この行為自体が自国あるいは個人のアイデンティティの模索ではないだろうか。

植民地として始まったオーストラリアに折衷主義建築が広まったのは、本国イギリスへの愛着と反発からであると考えられる。またオーストラリアに近代建築のルーツがあるとするならば、それは基本的に個人主義的な‘フリースタイル様式’といえるかもしれない。

■主要参考文献
1] Melbourne Architecture　Philip Goad 著 The Watermark Press 1999
2] Australian Gothic　Brian Andrews 著 Melbourne Univ. Press 2001
3] Identifying Australian Architecture Richard Apperly 著　Harper Collins Publishers 1989
4] New Free Style　AD 1980
5] Builders of Melbourne Mary Turner Shaw Cypress Books 1970
6] ゴシック・リヴァイヴァル　クリス・ブルックス著　岩波書店 2003